

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金

企画研究プロジェクトⅡ(教員・学生参加型) 2015年度研究成果報告書

プロジェクト 学生代表者	学科・学年	氏名
	福祉学科・3年	岡安 理香子
指導教員	所属・職名	氏名
	コミュニティ福祉学部・教授	森本 佳樹
研究課題	東日本大震災4年後の被災地 ～気仙沼市ヒアリング調査から学ぶ～	
プロジェクト 分担者	福田俊介・安田凌・岩渕あすか・宮島綾音・黒岩奈緒・松本幸子・新宮愛子・山本花菜・菅原真拡・小西麻由・高木謙・高橋正樹・大矢穂波・木村ひかる・佐々木紗里・井崎智康・岡安理香子	

プロジェクトの内容及び成果の概要

本研究は、「東日本大震災から4年後の被災地を知る」ことを大きな目的とし、宮城県気仙沼市におけるヒアリング調査を中心として活動を行った。調査前には、震災に関する学習を深めると共に、現地でのヒアリング調査に向けて話し合いを重ね、事前準備を行った。調査では、現地の市役所・市社協職員や地域住民の方々などからお話を伺い、さらには、気仙沼市内や大島の様子を自分たちの目で見ることによって、震災前後ならびに現在の状況や震災による影響について学習した。調査後は、現地で学んだことから、①自分たちに何ができるのか。②情報を発信し、被災地の現状を伝える。ことを焦点に議論を重ね、構内に掲示物の貼り出しを行った。掲示物の貼りだしは、学生や大学関係者に対して情報を発信し、被災地への関心・理解の促進を図るとともに震災の風化防止につなげることを目的としたものであり、掲示場所は1号館1階のMARUZEN書店前にした。この場所を選んだ理由は、学内でも人通りの多い場所であることから、日常的に情報の発信を行うことができる考えたからである。掲示物については、模造紙を使用し、ヒアリング調査先ごとに分け、内容を簡潔にまとめることで読みやすい内容を心掛け、多くの人に関心を持ってもらえるように工夫した。

本研究における成果は、大きく分けて2つある。1つはヒアリング調査を通しての本研究員個々の変化である。研究員は、本研究が発足する前から被災地に訪れたことがある者、他の団体で震災に関する活動を行っていた者、現地には行ったことがないが震災ならびに被災地について学んでいた者が中心となって構成されている為、ほとんどの研究員が震災に対しての知識を持った状態で研究をスタートさせることができた。しかし、実際に被災地を訪れ被災者の方々からお話を伺うと、知らなかったことや想像とは異なることが非常に多く、自分たちが震災について無知であったように感じた。現地で直接お話を聞いたからこそ知ることができた、震災当時のこと、今の生活、被災者の震災に対する思い・地元に対する思いがあり、各研究員に大きな印象を与えた。このことにより研究員の震災に対する意識が変化し、震災に関する知識が増えただけでなく、自分たちに何ができるのかを今まで以上に自分に引き付けて考えるようになった。今後、各研究員が個々に活動を発展させていくにあたっての基盤が本研究によって形成されたと感じる。

もう1つは掲示物による情報の発信である。学内の特に人目多い場所に掲示することで周囲からの反応も多く、震災および被災地に関して知る機会が少ない学生に対して知ってもらう機会を作ることができた。また、内容を簡潔にして読みやすくまとめたことも効果的であったように思う。情報としては発信したいことが沢山あったが、簡潔にまとめたことで目を向けてくれる人も増え、関心も持つ1つのきっかけとしての役割を担えたのではないかと考える。さらには情報の発信により、震災の風化防止としての機能も果たしたのではないかと考える。